

山博士は日曹にて高圧技術を自ら研究體得して、然かも機械を自ら設計する事の出来るまでに自分で研究を行つたのであります。

一方教室の方では中々高圧研究の豫算は無く困難であつたが、文部省科學研究費が出来て(荒木文部大臣の時代) やつと始めて其の援助で準備が出来る様になつた。即ち、佛國より機械購入を思ひ切り、日本に於て自分の手で造る事に進んだのであります。

一方學術振興會に於ては、當時の學術部次長、波多野海軍中將がこの問題に興味を持つて非常に後援して頂き、學振高壓化學の委員會を設け、その中の仕事の一つとして超高壓氣體壓縮機を製作する事として發足する様になつたのは今から三年前であります。

この頃、歸山博士は事情あつて日曹を退社、化學研究所の屬託として教室に研究して居り、専らこの超高壓壓縮機の製造に力をそそぐ事となつた。歸山博士は自らその設計を行つたのであります。

先づ問題になるのはその資材、特種鋼材である。(一口に五千氣壓と言ふが、一平方センチメートルに五噸の重さが加はつてゐる。普通の大砲發射の時砲内の壓力最高三千位の程度と云ふ事を考へて見れば、五千氣壓の壓縮機は大砲の様のもの、その材料も特種のもの入用の事御解りになると思ふ)之はどうしても民間では得られない。海軍の御援助を得なければならないので、御願ひして昭和十一年十一月一日海軍艦政本部第一部長であつた谷村豐太郎氏から、吳海軍工廠で引受けの見込の通知があり、昭和十六年四月八日、理學部長より正式に吳工廠に依頼する事になりました。

一年有餘の後、昭和十七年八月一日、受託品京大にて受領しました。此は主要部の材料の鍛造と加工

であつた。各部分品、加工、組立等は歸山氏が民間工場を指導して行つたが、段々緊迫せる情勢の爲仕事は困難を極めた。

戦争の進行と共に工員の應徴、應召、設備營團の施設吸收等で、民間に於て此の如き作業に困難を極めたが、歸山氏の努力の結果、昨年十二月、大半民間の工作品納入、廣島から京都への荷造、釘等にも大變の苦心をして本年に入り、京都で組立て、本年三月十一日、學振第十五特別委員會に於て運轉状況を見、始めて五千氣壓まで到達したのであります。

私は御列席の方々の御援助を感謝し、特に藤井榮三郎様の最初の御寄附に御禮を申し上げます。御高齡の爲御入浴無かつたのは實に残念であります。

又中野氏の御援助、特に故波多野中將の御助力に多大の感謝を捧げる。本日、波多野閣下にこの機械の見て頂けぬのは實に残念の至りであります。波多野閣下が此を見られたら如何に喜ばれた事かと想像します。然し、波多野閣下の遺志を繼いで日本學術振興會の爲め御努力下さつてゐる、三木閣下の東京より御來臨は、吾人の特に光榮とする處であります。又航空技術協會、野口研究所、其の他この高壓の機械製作研究にそれぞれ御援助下さつた方々に厚く御禮します次第であります。

但し機械が出来たのは研究の第一歩、これから此を利用し應用して今後の研究をやつて行かねばならぬのであります。

而して新しい、特に厥米の模放でない新しい處の研究をやつて行き度い。それには此の時代色々の困難が伴ふ。これには今迄吾人を御援助下さつたが、引き続き宜しく御願ひして、今後の成果を見て頂き度いと思ふのであります。

記 事

第八回 理事會

昭和19年4月5日午後四時ヨリ、於京都帝大總長室

出席者 大幸會長、羽田理事長、松井理事、堀場常務理事、鎌江監事、福原監事、萩原監事、松山監事、水波編輯幹事、松井(隆)主事

協議事項 I 昭和16, 17, 18年度收支決算報告及昭和19年度豫算審議

II 事業報告 1) 雜誌刊行ノ件、2) 寄附行爲ノ件

III 議 事 1) 藤井特別賞ニ關スル件

超高壓氣體壓縮機完成發表會

昭和19年5月6日午後十時ヨリ、於京都帝大理學部化學教室物理化學部

1) 経過報告 堀場信吉教授

2) 藤井特別賞授與 羽田 亨 總長

3) 受賞者講演「超高壓壓縮機に就て」歸山 亮博士

4) 超高壓壓縮機實驗